

有限会社 高林堂 1884(明治18年)年創業

口に入れた瞬間に誰もが笑顔になってしまおう。甘いものにはそんな不思議な力があります。今回紹介する老舗は、120年余にわたり宇都宮の四季を菓子で綴り、宮っ子たちに笑顔を届けてきた和菓子専門店「高林堂」。なかなか手に入らないと話題の銘菓「かりまん」の製造元です。

先代は職人、当代は商人、そして次代は企業人に

高林堂を代表するお菓子といえは々と聞かれて、すぐに「友志良賢」と答えるのは、昭和生まれの宮っ子たち。今や、高林堂といえば「かりまん」。テレビのランキング番組の「隠れたお土産お菓子」で第1位に選ばれ、食べてみたいのになかなか手に入らないとの評判を生んだ人気のお饅頭です。栃木名産のかん

びょうを生かした銘菓「友志良賢」と、同店の革新性を物語る「かりまん」。高林堂には、伝統と革新という相反する2つのキーワードが見事に両立しています。

その歴史は、明治18年の「友志良賢」の発売から始まります。創業の経緯は不明ですが、友志良賢は宮の名物として珍重され、昭和初期には二荒山神社前に大看板を掲げる有名菓子店となりました。そこに和菓子職人として

を引き継ぎ、千手町に和菓子専門店「高林堂」を開店させます。「父は根っからの和菓子職人で、とにかく教育は厳しかったんです。修業中の職人が続かないので、私は高校生の頃から店の手伝いをしていました」と、宇商高時代を振り返る現店主の和氣幸雄さん。高校生にしてすでに和菓子づくりの技を身に付けていた幸雄さんに「跡を継ぐ」以外の選択肢はなく、東京の菓子店での修業を経て、父親と同じ

菓子職人の道へ。しかし、「私は商人」と言う幸雄さんの視線の先にあったのは、経営という大きな課題でした。

「モータリゼーションの発達により経済の中心が郊外へと移行すること、いつまでも和菓子が安泰ではないことはわかっていました」と、取締役就任後に打ち立てたのが、曰く「動物的」な販売戦略。自動包装機を導入し、平成元年には郊外店の展開を開始しました。当時



海道の休憩スペースには、創業当初の「友志良賢」の包装紙をはじめ、歴史を物語る品々が展示されている

は、テイラミスが大ブームとなるなど、洋菓子文化が一気に華開いた時期。それでも「食文化の向上に伴い専門店の時代が来る」と先を読み、和菓子専門店にこだわったのも幸雄さんです。「父の遺言は『自家製館が作れないなら商売を辞めろ』。和菓子屋で館を作らないのは、寿司屋が米を炊かないのと同じこと。自家製館へのこだわりは、製菓業としてかたくなに守っています」。そして平成19年、満を持して海道店を出店。苦悩の末に看板の上生菓子に、次代を担う康匡さんと共に開発した「かりまん」や「福むすび」などの新商品を加え、現在も順調に売上を伸ばしています。守るべき伝統を守りつつ、改革を恐れない行動力で走り続ける幸雄さんが次代に望むのは、企業としての成長です。「先代が残した資産と伝統、私がつけた看板を継いで、和菓子ナンバーワンの専門店を目指してほしいと思います」



取締役店主の和氣幸雄さん(高林堂本店前で)

そこに和菓子職人として修業に入ったのが、先代の和氣勇雄氏。7年間の修業の後に徴兵され、終戦後に帰還した宇都宮で小さな菓子店を開業します。その後、勇雄氏の腕と実直で真面目な性格を見込んだ高林堂から「跡を任せたい」と声が掛かりました。そして昭和33年、勇雄氏は高林堂の大看板



昭和30年頃まで相生町(大道の沿い・現在/リノコが建つ辺り)にあった本店。昭和初期に、シンガイ写真館が撮影

有限会社 高林堂

営業時間:9:00~18:30
(東武店を除く)

本店
宇都宮市馬場通り3-4-18
☎028-633-4946

陽東店
宇都宮市陽東2-4-11
☎028-662-8777

海道店
宇都宮市海道町169-7
☎028-613-5556

氏家店
さくら市氏家2942-7
☎028-681-7771

宇都宮東武店
(東武宇都宮百貨店内)
☎028-636-3022